共同体（きょうどうたい）とは　wikiより
コミュニティ（英語：community）：英語で「共同体」を意味する語に由来。同じ地域に居住して利害を共にし、政治・経済・風俗などにおいて深く結びついている人々の集まり（社会）のこと（地域共同体）。日本語では「地域共同体」が「地域社会」をも意味し得うるため、転じて国際的な連帯やインターネット上の集まりなども「共同体」あるいは「コミュニティ」と呼ばれる（例：欧州共同体、ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体、アフリカ連合、米州機構、東アジア共同体（計画中）、国際航空通信共同体）。地域の共同体であることよりも地域住民の相互性を強調する場合、地域コミュニティとカタカナ表記する場合も多い。

ゲマインシャフト（ドイツ語：Gemeinschaft）：ドイツ語で「共同体」を意味する語に由来。地縁、血縁、友情などにより自然発生した有機的な社会集団のこと。共同体組織[1]。共同社会。ドイツの社会学者、フェルディナント・テンニースが、ゲゼルシャフト（ドイツ語：Gesellschaft、機能体組織[1]、利益社会）の対概念として提唱したもの。近代以降の社会や組織の性格を考える上で広く受け容れられている。組織の名称の一部として用いられることがある。欧州共同体など。

ゲマインシャフトとゲゼルシャフト
テンニース（1855-1936）は、人間社会が近代化すると共に、地縁や血縁、友情で深く結びついた自然発生的なゲマインシャフト（de:Gemeinschaft、共同体組織[1]）とは別に、利益や機能を第一に追求するゲゼルシャフト（de:Gesellschaft、機能体組織[1]、利益社会）が人為的に形成されていくと考えた。
ドイツ語では、de:Gemeinschaft（ゲマインシャフト）は概ね「共同体」を意味し、Gesellschaft（ゲゼルシャフト）は概ね「社会」を意味する。テンニースが提唱したこのゲゼルシャフト（機能体組織、利益社会）とゲマインシャフト（共同体組織）とは対概念であり、原始的伝統的共同体社会（共同体組織）を離れて、近代国家・会社・大都市のような利害関係に基づき機能面を重視して人為的に作られた利益社会（機能体組織）を近代社会の特徴であるとする。ゲマインシャフトでは人間関係が最重要視されるが、ゲゼルシャフトでは利益面や機能面が最重要視される。

日本においては、労働集約型の農業を基礎に「協働型社会」とも呼べるものが形成されていたと言われる。これは産業革命、工業化のプロセスに従って企業共同体へと変貌したと言われる（日本型社会主義）。しかし、バブル崩壊、経済のグローバル化、終身雇用制の崩壊、派遣労働者の採用の増加等に伴い、かつて企業そのものが家族共同体のようであると評された日本の企業風土も1990年代以降大きく変貌したと言える。

広義の共同体
学校のクラスのようなものも、学ぶということをテーマにし、それが単なる所属集団（membership group、単にその一員であるというだけの集団、会員権のようなもの）から、準拠集団（reference group、そこに参加できることが憧れとなるような集団）へと成長しているなら、やはり学びの共同体である。インターネット上にもさまざまなコミュニティがあるし、またオンラインゲームの中でできてきた仲間も一種のコミュニティを形成しているといってもいいかもしれない。

集団とは一般的には2人以上の組織のような人間の集まりであるが、厳密には共通の目的を持ち、目的と目標を共有し、目的と目標達成の為に互助しようと努力し、役割の分担が集団の中に定め、振る舞い方の一定の基準が存在し、集団自己同一視する、と社会心理学においては定義されており、その中でも組織関係、コミュニケーション関係、心理関係だけを挙げて人間関係と呼称する。
まずその規模により部分集団と全体集団という分類がある。社会において小規模な集団としては家族集団、職場集団または地域集団などの部分集団があり、これらさまざまな機能を持つ集団が連結した結果生じる大規模な集団が国家のような全体集団となる。さらに行動時間によっても災害時のボランティア団体などのように一定の目的を達成して解散する一時的集団と政府機関や企業などのように恒久的な存立の根拠がある集団である永続的集団の分類もある。さらに公的集団と私的集団、統制的集団と非統制的集団、利益集団と共同集団という分類がある。